

「どーお？ 私のフィンガーテク。処女だっておっぱいだけでイカせてあげられちゃうのよん☆」

と自らも息を荒げながら耳元でささやくローズマリ。

「あつ……あつ……あつ……耐え……なきや……犯罪者に……屈する……なんて……イヤだ……！」

「わつ……あはあ……私よつ……り随分年上なのに……くふつ！ そんなにおっぱいに執着……はあつ、するなんて……。私より、子供みたい……ですわ……んああ」

思わず緩んでしまいそうになる顔を必死に引き締めて、相手を小馬鹿にしたような笑みを作る。しかし、それも一揉み一揉みであつという間に崩れてしまいそうなほど危うい物ではあつた。

「あーらん。魔術婦警さんはこの程度では物足りないのね？」

いいわ、だったらあたしのとつておき見せてあげる」

ちよつとカチンと来たらしいマリは、そう言う口の中でブツブツと力ある言葉を唱えた。

するとなんと、マリーの黒手袋の右手からは細かな細かな繊毛が、左の手袋からはローションがしみ出し始めたのである。

「この繊毛は凄いわよ？ 最上級のベルベットにも負けない最高のさわり心地なんだから」

という、その手で改めて真木奈の乳房をギュッと握りしめた。

「ひらっ!? あひいいいいんんっっっ!?」

その瞬間強烈なまでの甘美な刺激が肉球の三百六十度から襲いかかってきた。アンダースーツ越しだというのに、そんな布

など無いかのようにさらつ、さらつという音を立てて、今や真っ赤になって汗だくの乳房が磨き上げられる。

「あおつっっっ！ あはああああおおあああんんんっ！」

「お、おっぱい……蕩けるう……蕩けちゃう……！」

一撫でされるごとにさらさらの繊毛が乳房の毛穴すらも刺激し、胸が熱く焼けるような甘美な業火が胸の中で燃え上がった。

さらつと乳房を撫でられ、きゆうと乳房を凹まされる度に真木奈は上半身を弓なりにしならせて、がくんがくんと身体を痙攣させる。

胸のみならず下腹部も熱くて仕方がなかった。まだ何者の侵入も許したことのないキツキツに閉じた割れ目から、幾筋もトロリと愛液がこぼれ出す。それは黒のボディーツに吸収されタイトなスカートの奥に隠された股布の部分が、重い黒に変色していく。

（だめ……負けちゃダメなの、真木奈……！）

極彩色の目眩でくらくらし始めた少女魔術捜査官だったが、まだ心は折れては居なかった。とろーんとなつてしまいそうな瞳を必死につり上げ、奥歯を食いしばって嵐のように胸から流し込まれる台風のような悦楽に耐えようとする。

そんな獲物の様子をうかがい取った華麗なる毒蜘蛛は、餌食にさらなる責めを加えていく。

「この毛羽手袋で一番気持ちいいところ、さすつてあげる……。遠慮無くイっちゃって良いのよ？ 大人だつてコレに耐える事なんて出来ないんだから」

とささやくと、今度は繊毛手袋でピンピンにしこりたつた

立った乳首をしよりりよりとまで回し始めた。

「つつつつ!! つつひいう……!! そこ……らめ……そこ……やめへえ……!! きつ……もちよすぎ……てえ……!」

少女の肉筒を毛羽でつまみ、ねじり、なぞり上げる。そのたびに数千本の小さな指で細かに乳首をなで上げられているような心地よさが乳首で爆発し、胸の奥を直撃する。頭の何が焼き切れそうなほどの壮絶な快感が情け容赦なく送り込まれ、真木奈の小さな身体から狂ったように甘酸っぱい汗が噴き出し続けた。

股間からはタイトの吸水容量を超えたのか、びゅびゅと飛び出た愛液がタイトスカートにかかってみだらな匂いを周囲には鳴っていく。

さらにその周りでぷつくりと盛り上がり始めた、薄い桜色をした乳輪をさらりとまであげられると、

「んきゃうううううううう……!!!!」

背筋が折れよとばかりに仰け反り返り、胸そのものがとろけてこぼれて行ってしまうのではないかという危機感すら感じる。

(ら……らめえ……。このままじゃ……わらひおっぱいですきなようにされひやう……! なんとか、防御、結界を……!)

魔術捜査官としての矜持と能力を振り絞り、心の中で簡易詠唱を行う。

(乳房の神経を……しゃだん……ふつ……はあ……いい、かんじ……)

完全に快感をシャットアウトすることは出来なかったがこの

程度なら耐えられそうだ。最後の意地で握り続けていた特殊警棒をグツと握り締め直し、精神力を総動員して魔力を流し込もうとした、その時――

「お姉さんはなんでもお見通しなのよん？ おいたをする子は、き・ら・い☆」

イヤらしく笑った逝かせ屋は左手のローションまみれの手袋で。乳首をにゆるん！ と強く擦過した

「!! きひつ、は、っひひひひひひひひひひひひひひひ!!」
練り上げた魔力は雲散霧消し、その全てが快感に変わってしまったかのような錯覚を覚えた。

ぬちゃぬちゃにつちゅにつちゅとイヤらしい音を立てながら乳首を弾き倒さされる度に、ぞくぞくぞくぞくうっつと背筋が震え、強烈な快感が全身に染み渡る。

粘液のぬるぬると、それを吸ったアンダーシャツに乳首をつまみ、揉み転がされる右胸の毛羽手袋責めにも匹敵するような爆発的快感が胸でわき起こる。

(はひひいっ……! み、右の防御結界を左へ……っつひんん！ ち、ちがあああう、両胸に結界を……あ、らめえ……もうポーツとして……かんがえられにやい……!)

「うふふ？ おいたをした子にはお仕置きをしなくっちゃね☆ さあ、イってしまいなさい、盛大に魔力を吹き出して、ね!」
というと、ローズマリーは両の手でぎにゅうつと乳房を握りしめた。

右の毛羽手袋からは乳房全体を無数の細かい手で愛撫され、それと同時に乳輪、乳首はもちろんその先までもがしよりつと

